

学位申請者 張 季媛（ちょう きえん）

論文名 現代日本語における接続助詞を用いた中途終了型発話文の記述的研究
—中途終了型発話文「～て。」の文法的特徴及びその意味・機能—

【審査の結果】

現代日本語における中途終了型発話文「～て。」（「また、そんな強がり言って。」「そういう質問があるかと思って。」「ちょっと、急に不安になって。」「気づいたのが、ちょっと遅くて。」「あんまり得意じゃなくて。」「えっと、だから、そうじゃなくて。」「海外移住なんて、やめた方がいいって言われちゃって。」等、以下「～て。」とする）を対象に、現代日本のテレビドラマ、及び「日本語日常会話コーパス」（モニター公開版、国立国語研究所）から収集した全 2,638 例の用例に基づき、その文法的特徴、及び意味・機能についての包括的な記述・分析を行った。「～て。」の分析を行うにあたっては、まず計 31 の接続助詞を用いた中途終了型発話文（「～から。」「～て。」「～けど。」「～し。」「～のに。」「～たら。」「～が。」「～ので。」等）を対象に、テレビドラマから収集した全 1,452 例の用例に基づき、その出現頻度を確認し、これらの接続助詞がすべて中途終了型発話文として等しく現れるわけではなく、接続助詞の中にも違いがあり、その違いが、それぞれの接続助詞が複文の従属節として用いられた際の従属度の違いに帰因すると考えられることを実証的に明らかにした。さらに、「～て。」については、複文の従属節として用いられた「～て」（以下「テ節」とする）との対応関係を詳細に検討することを通じて、主節を補って複文を再構成するよりも、むしろ文を言い終える形に言い換えたほうが自然であると考えられる「～て。」（例えば、「だからね、またね、ふるさと納税やって。」（「ふるさと納税やったんだ。」に言い換えるのが自然）等）が一定数見られることを明らかにし、中途終了型発話文「～て。」が 1 つの独立した文形式としての性質を獲得していると考えられることを示す興味深い言語事実を見出している。また、用例を丹念に観察することにより、「～て。」の意味・機能についても、先行研究にない新たな知見を加えた。

現代日本語において、その使用数が多いにもかかわらず、先行研究で詳細に考察されることの少なかった「～て。」を取り上げ、多くの用例に基づき、その文法的特徴及び意味

・機能をこのように包括的に記述・考察した研究はなく、「～て。」のみならず中途終了型発話文研究全体に対しても貢献することのできる研究成果を導き出している。全編にわたり丹念な考察が行われ、十分な推敲を経て構成・執筆された質の高い記述文でまとめられており、データの解釈及びその説明・記述も洞察力を備えた、説得力のあるものとなっている。形式・内容のいずれの面においても極めて質の高い博士論文であると評価でき、審査委員会は全員一致で、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。

なお、審査委員会は、谷口龍子を主査とし、本学の鈴木智美教授、花蘭悟教授、中村彰准教授、学外から早津恵美子氏（名古屋外国語大学教授・本学名誉教授、日本語学）を副査とする5名で構成された。

【論文の概要】

本論文は、現代日本語の中途終了型発話文「～て。」を対象に、その文法的特徴及び意味・機能を詳細かつ包括的に記述し、考察を行ったものである。

本論文は、第Ⅰ部序論、第Ⅱ部本論、第Ⅲ部結論の3部から構成される。参考資料として、執筆者自身が現代日本のテレビドラマ4本（計35時間15分）から収集し、前後の文脈も含めて文字化を行った中途終了型発話文「～て。」の用例全299例が、意味・機能別に整理され、全212ページの別冊資料としてまとめられ、付されている。

論文の第Ⅰ部序論（第1章～第4章）では、まず第1章で、論文の目的と研究対象、研究の対象とする範囲、データ収集の対象、論文の構成、及び論文において使用する用語について述べている。第2章では、主要な先行研究について批判的に検討を行い、第3章では、その検討内容を踏まえ、本論文において解決すべき研究課題を提示している。第4章では、扱うデータとその収集の手順や注意点など、研究方法についてまとめている。

第Ⅱ部本論（第5章～第8章）は、本論①（第5章）と本論②（第6章～第8章）から構成され、本論①は中途終了型発話文を論じるにあたり、いわばその前提となる考察部分であり、本論②は、本論文の中心をなす「～て。」についての記述・考察部分である。

第5章は、本論①の部分であり、計31の接続助詞（「から」「て」「けど」「のに」「たら」「が」等）を用いた中途終了型発話文について、現代日本のテレビドラマから収集した全1,452例のデータに基づき、その出現状況を確認している。その結果、全ての接続助詞が中途終了型発話文として等しく現れるわけではなく、中途終了型発話文に用いられる接続助詞の中にも違いがあり、その違いが、それぞれの接続助詞が複文の従属節として用いられた際の従属度の違いに帰因すると考えられることが指摘される。中途終了型発話文として用いられる接続助詞は、ほぼ南（1974）（南不二男『現代日本語の構造』大修館書店、1974年）における分類のC類あるいはB類のもの（従属度の低いもの、及び中間的なもの）

の)であり、A類(従属度が高いもの)とされる接続助詞の中では、唯一、本論文の研究対象である「て」のみが中途終了型発話文として現れ得ることも確認されている。なお、「て」自体は、複文の従属節において、A、B、Cのいずれの類にも現れ得る。さらに、これらの中途終了型発話文の述語的部分に着目し、そこに現れる要素からその形式的特徴を見た結果、これら接続助詞が複文の従属節として用いられる場合と、中途終了型発話文として現れる場合とでは、「ノダ」との共起に違いが見られ、中途終了型発話文には、対事的或いは対人的な表現態度を持つムードの「ノダ」(「もっと話したいのだけど。」等)は現れるが、名詞化する機能しか持たないスコープの「ノ(ダ)」(「参加するのなら、きちんと準備してください。」等)は、中途終了型発話文においては現れないということも明らかにされている。このことは、中途終了型発話文が独立文との平行性を持つという先行研究における指摘を、具体的な言語事実をもって裏付けるものとなっている。

本論②(第6章～第8章)は、本論文の中心をなす記述・考察部分で、現代日本のテレビドラマ及び「日本語日常会話コーパス」(モニター公開版、国立国語研究所)から収集した計2,638例の「～て。」の用例に基づき、「～て。」とそれに対応するテ節との関係、「～て。」の述語的部分に見られる文法的特徴、さらに「～て。」の意味・機能について、解明を行った部分である。

第6章では、中途終了型発話文「～て。」と、テ節(複文の従属節)との対応関係について見た結果、「～て。」には、南(1974)における複文の従属節の従属度による分類のうち、A、B、C類のいずれの類とも対応するものが見られるが、そのうち最も多いのはB類のテ節と対応する「～て。」であり、これが9割以上を占めるということがまず確認される。また、複文においては、「継起的な動作・状態」を表すテ節(「図書館に行つて、資料を調べた。」等)が最も多いとされるが、「～て。」に対応するテ節を見ると、「原因・理由」を表すテ節(「忙しすぎて、実家に帰れなかった。」等)が最も多く、全体の8割近くを占め、複文のテ節と「～て。」の間には、その意味・用法の分布においてずれが見られることも明らかになっている。また、「～て。」と対応するA類のテ節(「のんびりしてて、気持ちがいい。」等)には、述部に現れる動詞に「意志性が弱い」という共通の特徴が見られるという言語事実も指摘される。さらに、主節を補って複文を再構成するより、むしろ文を言い終える形に言い換えたほうが自然であると考えられる「主節が想定しにくい『～て。』」(例えば、「やめようつてゆつてやめさせて、炊飯器も持つて帰らして。」(「炊飯器も持つて帰らしたんだ。」に言い換えると自然)等)が全体の約1割程度見られることが示され、「～て。」が1つの独立した文形式としての性質を獲得していると考えられる興味深い言語事実が指摘される。

第7章では、「～て。」の述語的部分に現れる表現を、品詞、及び意志性という2つの観点から分析している。品詞別に見ると、動詞述語が全体の9割以上を占め、特に、「言

う」と「思う」の出現数が、動詞述語においても、また、「～て。」の述語的部分に用いられる語の全体においても顕著であるという事実が指摘される。そのほかにも、名詞が述語部分に現れる「～て。」のうち、「-ではない」という否定形をとるもの（「いや、そういう話じゃなくて。」等）が9割以上を占めていること、形容詞述語の中では、属性形容詞が現れるもの（「夏は虫が多くて。」等）がその約8割を占めていること、形容動詞が「～て。」の述語部分に現れるもの（「人を説得するのが得意じゃなくて。」等）はわずか3例しか見られなかったことなど、「～て。」の述語的部分の様相が品詞の観点から必ずしも一様ではないことが示される。また、「～て。」の述語的部分には、無意志性のもの（「たまたま行った公園にブランコがあって。」等）が8割以上を占めており、意志性の述語を持つものについても、「～て。」という表現の全体を観察すると、そこに意志性は見られず、むしろ描写・叙述の性質が強いもの（「先週、パリから戻ってきて。」等）も見られることが指摘されている。

第8章では、「～て。」の意味・機能についての考察が行われ、先行研究において指摘されていない新たな知見が複数提示されている。まず、先行研究において「～て。」は「事情の説明」を行うものであるとされてきたが、「～て。」の担う「事情の説明」とは、「話し手が自分の行動、或いは考え・主張などについて、その妥当性を説明する」こと、或いは「取り上げられている事柄を相手に十分理解させるために、話し手が補足情報として説明する」ことのいずれかに相当すると考えられるということ、例に基づき示し、先行研究における「～て。」の分析・記述を精緻化している。また、「～て。」は基本的に「事情の説明」を行うものであるが、文脈上の内容事態及び文脈外の常識などの情報との関係づけを通し、「感嘆」という意味・機能もそこに加わるタイプが見られる（「こんなに追い詰めてたなんて知らなくて。」には「事情の説明」に「陳謝」の意味が加わる等）との分析を行い、先行研究においてとられてきた「事情の説明」と「感嘆」という2つの意味・機能を相補分布的なものとする見方を修正している。さらに、「～て。」には、上昇イントネーションを伴って疑問の形で発話され（「留学先は大好きなパリじゃなくて？」等）、話し手が、既に文脈により推測できていることについて会話の相手に確認を求めるという、先行研究において取り上げられていない「情報の確認」という意味・機能が見られることを指摘する。この場合、文脈から得られた話し手の推測と、話し手が既に把握している情報や常識などとの間には認識のギャップがある場合が多いため、話し手の発話には軽い驚きを伴う場合が多いとの分析が行われている。

第Ⅲ部は結論（第9章）部分で、本論文において明らかになったこと、本論文の意義、本論文の限界及び今後の課題についてまとめられている。

【講評】

データを丹念に見ることにより、中途終了型発話文「～て。」をめぐる様々な興味深い言語事実を導き出し、「～て。」の全体像を詳細に明らかにすることに成功している。論文全体が十分な推敲を経て構成・記述されたものとなっており、豊富な用例の中からの確かな例を挙げつつ、洞察力をもった解釈に基づき説得力のある論述が行われ、形式・内容ともに質の高い論文として高く評価できる。特に、中途終了型発話文としての成立の可能性を、当該の接続助詞が複文の従属節として用いられた際の従属度の違いと結びつけて考察した点は、これまでの中途終了型発話文研究に抜け落ちていた盲点とも言える視点であり、堅実な研究手法が意義ある考察結果を導き出したものとなっている。また、主節を補って複文を再構成するよりも、むしろ文を言い終える形に言い換えたほうが自然であると考えられる「主節が想定しにくい『～て。』」が一定数存在するという指摘は、「～て。」が1つの独立した文形式としての性質を獲得していると考えられることを示唆するものと考えられ、「～て。」のみならず、中途終了型発話文の存在意義、構文としての独立性を論じる上で、中途終了型発話文研究全体に与えるインパクトも大きい。

なお、論文に対する上記のような高い評価に加えて、さらに審査委員からは、言語学的な種々の観点から、論文執筆者の見解を問う以下のような質問が出された。

- ・ 用例が観察されないということは、そのような文が不可能であるということと同義であるのか。
- ・ 本来文脈依存性の高いテ節の性質が、中途終了型発話文「～て。」においてはどうか関わってくるか。
- ・ 多くの言語事実が明らかになったが、「なぜそのような分布になっているのか」という問いにどこまで答えることが可能か。
- ・ 「原因・理由」を表すテ節をより細かく分類してみれば、「～て。」とテ節との対応について、さらに明らかになることがないか。
- ・ 「て」を「接続助詞」ととらえず、「～て」の形をもって1つの活用形であることととらえることも可能ではないか。
- ・ 語用論的機能の観点からは、「～て。」について、さらにどのようなことが言えるか。

これらの問いに対して、学位申請者は1つ1つ自身の立場と考えを説明し、今後の課題とすべき点については率直にその旨を述べ、さらに中途終了型発話文についての発展的な考察を行っていく考えを持っていることも示され、審査の場において非常に有意義な議論が行われた。

公開審査および最終試験は、新型コロナウイルス感染症が完全に収束を迎えていない状

況に鑑み、2022年5月21日（土）9:30～11:30にZoomオンライン方式で行われた。申請者より、博士論文の概要について説明が行われた後、続いて審査委員との質疑応答が行われた。各審査委員からの質問および指摘に対して、申請者は、1つ1つ丁寧かつ明快に考えを説明し、今後さらに研究を深め、発展させていく姿勢と具体的な考えを持っていること、そしてその実力を十分に有していることが確認された。

【総合評価】

学位申請論文の内容、最終試験における発表、および質疑に対する応答等を総合的に判断した結果、審査委員会では、全員一致で、本申請論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。

以上